

Title	明治期京都の日本画と染織 : 竹内栖鳳と高島屋に注目して
Author(s)	廣田, 孝
Citation	デザイン理論. 2002, 41, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52879
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

明治期京都の日本画と染織 — 竹内栖鳳と高島屋に注目して — 廣田 孝／京都女子大学

本論は明治期の京都で活躍した日本画家竹内栖鳳が京都の染織業界に与えた影響について考察することを目的としている。

栖鳳の活動について叙述する前に、明治期京都の染織業界と日本画家との関係について少し見ておきたい。竹内栖鳳の師・幸野棹嶺の自筆履歴書や岸竹堂らの記録を見ると、栖鳳のひとつ前の世代にあたる日本画家たちは個別の業者から引き受けた友禅下絵を副業としていた事実のあることが理解される。

竹内栖鳳が京都の染織業界と関係を持つのは主に高島屋との関係を通じてである。

高島屋は天保2年(1831年)に開業し、呉服商として「高島屋飯田新七店」と称した。これが現在の(株)高島屋の創設期である。高島屋は明治21年に「画工室」を常設して染織品の下絵制作を幸野棹嶺、岸竹堂、今尾景年、竹内栖鳳らの日本画家に任せた。栖鳳は明治22年2月から23年4月まで高島屋意匠部に勤務した。その後も高島屋の囑託として、明治末まで友禅下絵を継続して制作した事実がある。

明治30年代の高島屋は海外万国博覧会に多くの美術染織品、特にビロード友禅作品を出品して成果を挙げた。『明治期万国博覧会美術品出品目録』、『高島屋百年史』の記事から明治33年のパリ万国博覧会を始め、明治36年第5回内国勲業博覧会、明治37年セントルイス万国博覧会、明治43年日英博覧会でも成果を挙げている事がわかる。いずれにも栖鳳などの下絵で制作された友禅作品が出品された。

特にパリ万国博覧会の際には高島屋はパリ万博見学を含め、欧州百貨店事情視察のため

高島屋京都店店長ら関係者一行を派遣している。半年後、栖鳳も京都市、農商務省から出張を命じられ、パリ万博をはじめ欧州の美術館を見学している。またロンドンの高島屋出張所で彼らと合流した事実がある。

栖鳳の渡欧目的は欧州美術研究、と従来理解されてきた。しかし、栖鳳と高島屋の密接な関係を考慮すれば、栖鳳は滞欧中に高島屋の輸出産業(=友禅作品)の販売促進のための調査(マーケティング・リサーチ)を行っていたのではないかと、という疑問が生じる。友禅壁掛けの非常に高価なこと、日英博覧会では高島屋が独力で建てた「高島屋館」に栖鳳「アレタ立に」(第3回文展出品作品)を展示したり、と両者の関係は非常に深い事がうかがわせる。

さらに、実際に栖鳳の下絵作品がビロード友禅に仕立て上げられたほか、高島屋史料館所蔵の友禅下絵を検討したところ、栖鳳の用いた表現方法を取った下絵が多く検出することができた。

現在、高島屋史料館に所蔵される友禅下絵は1160点を数える。友禅下絵の制作時期は高島屋が「画工室」を設置した明治21年からであり、棹嶺、竹堂らの古い日本画をベースにした下絵から栖鳳を代表例とする写実的表現の作品、神坂雪佳の図案要素の強い作品まで含まれる。

高島屋史料館所蔵の友禅下絵の中で、注目されるのは京都府画学校東京科卒業生・上田萬秋や上田萬秋より10年後に美術工芸学校を卒業して高島屋に勤務した本多萬翠の卒業制作と友禅下絵を比較検討すれば、彼らの友禅

下絵は明らかに写実的な要素を強く持っていることが指摘できる。

栖鳳は京都市立美術工芸学校での教育において、従来の日本画から「写生」中心の日本画に改革したが、史料館所蔵下絵の内容も同様の「写生」である。また先述した上田萬秋、本多萬翠を始め、下絵制作者として氏名が明確な人物の経歴を調査すると、京都市立美術工芸学校卒業生であり、時期的にも栖鳳の教育を受けたに違いないことが判明した。

もう一人、下絵の図案家として重要な役割をはたしたのが神坂雪佳である。この人物は図案家として著名であり、京都市立工芸図案調製所、美術工芸学校で図案担当の教員であった。高島屋史料館所蔵の雪佳下絵を見ても、表現は光琳風というべき簡略化された装飾的要素を強く持っている。

この様な分析を通して、まず竹内栖鳳と神坂雪佳に代表される二つの流れがある事が判明した。この二つの流れは具体的には日本画と図案の流れと言い換えることができるが、これは当時の京都市立美術工芸学校の絵画科、工芸図案科という二つの分野と対応しており、それを反映して、高島屋の友禅下絵においても同様のことが認められる、と考えた方が適切ではないだろうか。

結 論

竹内栖鳳が染織業界で果たした役割りは、写生を活かした日本画を友禅下絵に利用して、友禅の図案を革新したことである、と言えよう。事実、明治後半の各種の博覧会に出品された友禅作品の多くが写生を活かした日本画であったことは今まで述べてきた通りである。

竹内栖鳳を中心に見てきたが、下絵制作での神坂雪佳の働きには大きいものがあった。図案家である神坂雪佳については明治期前半期から後半期にかけての目立った変化はなく、

継続して琳派風の図案を制作している。同様に明治36年に京都市立美術工芸学校図案科卒業した中西晴霞の友禅下絵も目立った変化はない。そして日本画家が友禅の下絵から手を引いた後、例えば神坂雪佳に指導された図案家という新しい職業の図案製作者が友禅下絵を担当していった、と推測されよう。